

『文学的主体の形成』(<特集>追想 小田切秀雄先生  
)

著者	高崎 隆治
雑誌名	日本文学誌要
巻	63
ページ	96-97
発行年	2001-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020152">http://hdl.handle.net/10114/00020152</a>

## 『文学的<sup>\*</sup>主体の形成』

高崎 隆 治

ひとはだれもが忘れ難い本を持っている。

この本が刊行された一九四七年八月は、戦後わずか二年で、東京はまだ廃墟であった。しかし、生き残った学徒兵の私が、絶望とも虚無とも無関係でいられたのは、明日に望みを託す「文学」という星に憧れていたからである。

人間の魂は文学によって成長し形成されるとは、中学生のころからの信条・信念であったが、「どう生きるか」ではなく「どう死ぬか」を考えなければならなくなった時、人間はなにを頼りになにに救いを求めるかはことわるまでもないことである。

この『文学的主体の形成』は、そういう時代と切り離すことができない小田切秀雄の戦争下の評論六篇を併載している。「あとがき」にはつぎのような一節がある。

「戦争中書いて発表したものを幾つか入れておいたから何らかの資料になるだろう。面従腹背の文章なので、嫌気がさして手を入れかけてみたがうまく行かなかった。ただ「腹背」の方がわりに正直に出てゐるのが多少の取柄かと考へて捨てないこ

とにした。なお、これらは昭和十九年春に、いまこの本の出る昭森社から単行本の評論集として出る筈だったものの一部分だ。当時の空気で、出さない方がいいといふことになったがそのうち空襲で原稿全部が焼けてしまった。」

「昭和十九年春」といえば、いわゆる「学徒出陣」の後だが、二十才未満の学生はまだ講義を受けていたから、もし出版されていたなら、おそらく私はそれを読んで戦場へ赴くことになったであろう。

それはそれとして、著者は「何かの資料になるだろう」と書いているが、「何か」どころか、当時の文学状況を知る上での欠かせない貴重な資料である。あの戦争下にこのような「面従腹背」の文章はきわめて稀で、当時の評論家たちの文章をいま雑誌などで読み返してみても、ほとんどが読むに耐えないものばかりである。

とはいえ、戦争下の文章について、「面従腹背」か全面的な迎合妥協であるかを見分けるのは、半世紀以上を経た現在ではたいへんむずかしいことである。戦時下の情勢・状況を正確に把握し、その時代の文脈の中で作品を捉えなければならない不可避の前提があるからだ。

むろん、小田切秀雄の「面従腹背」の評論は、この本に収められているものだけではない。タイトルは忘れてしまったが、一九四二年・三年頃、そのいくつかを私は文学雑誌で読んでいる。いま、早急にそれを探し出す余裕はないので、この本から著者の本領を示す表現をごく短かく抜き出してみる。

「現代の作家は一体なにを考へてゐるのだろうかと思ふ。だ

いいちに、作家としての自己の存在の意味をいっただいどんな風に、どんなところに自覚してゐるのだろうかと思ふ。時局に対して謙遜であることはよい。しかし謙遜であるといふことと、作家としての自己の存在の意義の自覚といふことが、どのような形で作家の内部において相結び合っているのが私にはよく納得がゆかぬ(略)現代の作品のなかには一般に国民及びその生活に対するどれほどのずばぬけた深い愛情も熟慮も省察もないのである。」

こういう文章が、国策を推進する当局や全面妥協の作家たちに非難攻撃を受けないはずはないのである。「謙遜はよい」といながら、これは国策文学の全否定であると彼等は色をなしたにちがいないのである。当時の文学がどのようなにも救いようがなかったことを右のわずかな引用文からもわかるはずだが、小田切秀雄のこういう大胆な「面従腹背」すら読みとれぬ批評家まがいが昨今はやたらに増殖している。遠慮なく言えば、大学でなにを学んだかではなく、大学でなにを教えなかったかということになるだろう。ついでに言えば、この本の巻末に付録として収められている「文学者の戦争責任」について講義をすれば、少なくとも四年間では学びきれないであろう。

この「文学者の戦争責任」は、戦後、小田切秀雄が評論家のだれよりも早く真先に問題としたテーマなのだが、文末に近く、続篇を予告しながら、ついに陽の目をみるに至らなかったいわくつきの文章である。もちろん、それは小田切秀雄の意志ではなかった。「さしきわりがあつて」とは、後年私が直接たしかめたときの小田切秀雄の言葉だが、前後の会話から、予測してい

たとおり政治的圧力によるものと判断された。しかも、一方には小田切秀雄の戦争責任を云々する者までいたのである。いま、ここでそのことを論ずるつもりは私にはない。だが、「文学者の戦争責任」は、小田切秀雄でなければあの時代に論ずることができなかったであろう。

なお、この本の第一部に収められている敗戦直後の評論のうち、本のタイトルとなった「文学的主体の形成」は、当時の左翼文学陣営にいわゆる「主体性論争」を巻き起こしたもので、学生までが右に左に大揺れに揺れる結果を生んだ。文学的空白の世代である戦中派にとっては足元を掬われるような衝撃で、「おっしゃるとおりです」としか言いようがなかった。なぜ足元を掬われたかといえば、御多聞にもれず、「進歩的・革新的」とよばれた学徒の多くは、ただやみくもに赤旗を振りまわして事足れりとしていたからである。

そもそも「主体性」なるものは、あの戦争下に小田切秀雄が命をかけて唱えたもので、先に引用した部分だけでもそれは十分に表明されている。戦争下の小田切秀雄の背骨となっているのはまさにそれで、この本は若き日の著者の文学精神を手にとるようにはつきり示したものである。

(たかさき りゅうじ・一九四八年卒)

※一九四七年八月昭森社刊